

(財) 国際通貨研究所
経済調査部長・チーフエコノミスト
竹中 正治

弁論で勝負するアメリカ人、沈黙する日本人 「俺にも言わせろ」衝動を解き放とう

弁論勝負のアメリカ人、沈黙する日本人：掲載タイトル

【「かわいそうなくらい苦労しているんですよ」】

米国民主党の大統領選候補者選で、ヒラリー・クリントンのネガティブ・キャンペーンに腹を立てたオバマが、「ヒラリー、恥を知れ！(Shame on Hillary!）」と発言した。それに応じてヒラリーが「あんたこそ、恥を知れ！(Shame on you!）」とやり返し、この一幕が話題になった。勝負の決着がつくまでは、あくまでも弱みを見せず、徹底的に強気でやり合う。これは米国政治劇の定石だ。ヒラリーの見せた「涙」ですら、戦う姿勢をより効果的に演出するための小道具に過ぎない。

どうしても比べてしまわずにいけないのが、4月9日の国会で行われた党首討論で、福田首相が民主党の小沢代表に対して言ってしまったセリフ、「かわいそうなくらい苦労しているんですよ」だ。

福田首相は敢えて質疑の攻守を替え、民主党の小沢代表に対し、日銀総裁問題での「人事権の乱用」、「民主党の意思決定の遅さ」などを攻めたところまでは良かった。ところが最後に「泣きを入れている」と思われても仕方がない一言を言ってしまった。小沢党首は不敵な冷笑で応じていた。これではまるで、漫画ドラエモンに登場するジャイアン(いじめっ子)相手に泣きを入れているのび太の構図である。

【雄弁家が多い米国の政治家、企業トップ】

民主党のオバマ候補は上院議員1期目という若さにもかかわらず、聴衆を感動させる演説で注目される存在に躍り出た。そして、あれよあれよと言う間に、圧倒的な知名度と実績を誇っていたヒラリー・クリントンを逆転してしまった。

オバマに限らない。米国で政治家、企業のCEOなどのスピーチを聞く度に思うが、みな演説が上手い。日本の政治家や大企業のトップと比べると段違いに上手い。もちろん、米国でも日本でも個人差はある。しかし米国では地位の高い人ほど演説が上手い人が多い。

リーダーの雄弁だけではない。米国では1時間の講演なら講演者が一方的に喋るのは普通30分までだ。それ以上喋ると聴衆がフラストレーションを起こす。半分以上の時間は質疑応答、討議に当てられる。討議の時間になると、「俺にも言わせろ」、「あたしにも質問させて」と尽きない。

もちろん、議論を発展させる建設的なコメントや質問が歓迎されるが、ぴんとの外れた質問や、勘違いコメント、講演内容に関わりのない質問まで臆面もなくとび出す。それでも公論の場でのエチケット(例えばひとりで長々と喋らない)を守って発言する限り、沈黙よりも発言が歓迎される。

反対に日本の講演会はほとんど講演者が一方的に喋り、質疑応答は最後の10分だけという場合が多い。質疑に時間をとって、し〜んとして質問もコメントもなかなか出てこない。一体この日米の違いはどこから生じるのか？

ちょっと「日本通」のアメリカ人に聞けば、こんな答えが返ってくるかもしれない。「日本の社会や組織は閉鎖的、権威主義的で、意思決定は事前の根回しで予め準備されるでしょ。だからオープンな討議やプレゼンテーションにあまり価値が置かれない。それだからじゃない？」

しかし多少でも米国に身を置いて観察すれば判ることだが、米国の政治も見た目ほどオープンではないし、企業統治ではCEOの独裁的な力が問題になっている。それでも米国の文化的な規範・価値観が演説やディベートに日本よりも遥かに高い価値を置いていることは間違いない。

実際、海外ではあまり喋らない日本人は損をしている。英語の上手下手の問題ではない。下手な英語でもガンガン主張している連中は沢山いるのだ。「日本人は何事も集団主義的で、個人の意見がないのじゃないか」などという偏見がまかり通ってしまう。ではなぜそうした日米の相違が生まれたのか？ 実は判り易い事実の中に、日本人のプレゼン下手の原因があると私は思う。

【日本の子供の読み書き訓練は大変】

米国で娘の小学校のクラスメイトのアメリカ人宅で、話題が日米の小学校での国語教育に及んだ。米国の子供と比べると、日本の子供達は、表音文字としてひらがなとカタカナを学び、表意文字として漢字を学ぶ。更に小学校高学年からアルファベットでローマ字を学び、中学1年から英語を学ぶわけで、米国の小学生に比べると読み書きに要する学習量は大変に多い、と私は語った。

アメリカ人の奥さんが、漢字はどのくらいの数があるのか、100か200かと問うので、一般に使用されている数で1000とか2000だと言ったら、目をまるくされた。更にアルファベット24文字に対して、ひらがなは50音文字で、そのままとPCのキーボードにのり切らない。だから私達日本人の多くはワープロソフトを使用する時、アルファベットのキーボードをたたきながら、PC画面上にひらがな、カタカナ、漢字の3種の文字で構成された日本語文章を作成するのだと話したら、「信じられない。魔法みたいだ」と言う。そうりゃあそうだろう。英語ワープロ・ユーザーは「文字変換の魔法」を知らないのだ。

【文字体系の複雑さが生み出した相違】

アメリカ人にそういう説明をしながら、はっと気がついた。実際、日本人は子供時代に「書く」ことを学ぶためにアメリカ人とは比較にならないほどの学習労力を費やしている。しかも計算訓練にもアメリカ人以上の訓練を費やす。だから日本の小学生で算数の計算能力が平均的な子供でも、米国の小学校ではトップ水準だ。しかし、学習に費やせる時間には限りがあるので、それだけ日本の子供が書く訓練に多くの労力を費やせば、必然的に犠牲になる訓練が出てくる。それが口頭プレゼン能力、大勢の前で話す能力の訓練である。

自分の子供時分の記憶を辿ると、幼稚園から小学校初期の頃までは、「みんなの前でお話をしましょう」というレッスンがあった。ところが小学校の半ば頃からそうした「お話レッスン」は乏しくなり、その後ほとんど復活しない。読み書き、算数に必要とされる訓練時間が多くなり、更に社会や理科の知識習得が増え始めると、口頭プレゼンの訓練時間は切り詰められ、ほとんどゼロになってしまう。大学受験でも口頭試問などはないから、中学、高校での受験勉強でも口頭プレゼン訓練はほとんど復活しない。

一方米国の小学校では、「みんなの前でお話しよう」のレッスンは継続し、かなりの時間が費やされている。娘が通っていた米国の公立小学校でも、かなり多くのレッスン時間が口頭プレゼン訓練に費やされていた。例えば“Book Report” “News Report”と呼ばれ、読んだ本

や新聞ニュースについてレポートする作業がある。日本なら「読書感想文」を書いておしまいだろうが、“Book Report”ではレポートを書き、その後クラスの生徒の前で口頭プレゼンをする。そのプレゼン内容が幾つもの評価項目で評点される。

米国における口頭プレゼン能力の訓練は、初等中等教育のみではない。日本人が米国の大学、大学院に留学すると、口頭プレゼンやディベートの時間が多いことに驚き、日本の大学教育との大きな相違を経験する。

訓練に費やす学習労力にこれだけの日米格差があれば、日本人の相対的な口頭プレゼン下手も無理からぬことである。そして米国の小学校がこれだけ口頭プレゼン訓練に時間が割けられること的前提条件として、文字を書く訓練に要する時間が日本に比べて相対的に少ないことがあると私は思う。

【文章文化の日本人はブログ書き込みが世界一好き】

日本人が文章文化だと考えると、講演会では静粛過ぎる聴衆が、一転ブログの世界で大胆・活発に書き込み合っている日本の事情が理解できる。某ブログ調査データによると、世界のブログ書き込み言語のシェアで日本語は 37%と英語の 33%を凌駕していると言う。英語ユーザーの人口が日本語ユーザーの数倍であることを勘案すると、これが本当なら驚くべきことだ。<http://www.sifry.com/alerts/archives/000493.html>

ブログの匿名性によって助長されている面もあるだろうが、文章文化の日本人はブログの書き込みが世界一好きな国民だということになる。NBonline でも「俺にも言わせろ」、「あんた、何言ってるの」と溢れんばかりに寄せられるコメントの群れは、「百家争鳴」と言うべきか、「暴言有理」とでも呼ぶべきか。

文章文化の日本人の特性は外国語の教育、勉強でも出てしまう。英語の読み書きがかなりできるのに、英語会話となるとまるでお手上げの日本人は多い。反対にアメリカ人は日本語を勉強してかなり流暢な日本語を話す場合でも、日本語文章を書くのはとても苦手というのが一般的だ。

もちろん、学校教育内容にはその社会の文化的な価値観が反映される。従って、米国が口頭プレゼンを重視する文化である故に、教育でもプレゼン訓練に多くの時間が割り当てられるという逆の説明も可能である。しかし、アルファベットという比較的簡単な文字体系を持ったことが、口頭プレゼン訓練により多くの時間を費やすことを可能にし、この2つの文化要素は相補的に強化されて来たのではなかろうか。反対に日本では複雑な文字体系を持ったことと、文章論述を重視する文化要素が相補的、相互強化的に発展してきたと言えないだろうか。

複雑な文字体系は日本だけではない。漢字は 1949 年革命後の中国では大幅に簡略化されたものが使用されているが、それ以前は数も多く、表記も現代に比べると遥かに複雑だった。浅田次郎の「蒼穹の昴」には清朝末期の科挙試験の様子が描かれていて面白い。科挙試験で要求されるのは様々な古典書物に精通し、文章の徹底した形式美の要件を満たしながら格調の高い文章を書くことである。

真言密教の祖で日本古代随一の天才と言われた空海が、遣唐使の一行に加わり唐に渡った時、嵐で船が流され、航路を大きくそれて中国南部に漂着した。地元の官吏が漂着した一行を検分にきたが、遣唐使を迎えたことのない地元の官吏は日本国の使節として認知してくれない。そこで既に日本で中国の学問を習得していた博学英才の空海は、筆を取り、事情説明の文章を官吏に献上する。官吏は完璧な中国語で書かれた空海の文章を読み、

その並外れた格調の高さに驚愕し、空海一行が正式な遣唐使であると認めたと言う逸話がある。

このように中国も口頭プレゼンよりも文章論述を重視した文化的傾向が濃厚だった。文字文化が発展するその初期条件において、たまたま複雑な文字体系を生み出した結果、その複雑な文字体系を自在に駆使できることが文化的価値として尊重、重要視されるようになった。こうして複雑な文字体系と文章論述重視の2つの文化的な要素が相補的、相互強化的に発展して来たと言えるのではないか。ただし1949年の革命後はそうした傾向は正反対に振れる。複雑な文字体系は知識を知識階級が独占する傾向を生み出すと考えられ、漢字の徹底的な簡略化が進められた。

【雄弁でなければ政治家にはなれない米国】

一方、アルファベットを文字体系とした西洋では、単語を憶える、文法を習得するという言語共通の訓練を積みさえすれば、文章作成自体は相対的に容易である。容易なものでは差別化し難い。知識人を目指す中国や日本の子弟は文章作成訓練により多くの時間を費やし、複雑な文字体系を駆使した文章文化を発展させた。一方で、西洋の子弟は別のプレゼン技術の訓練に時間を費やした。その結果生み出されたのが弁論文化である。演説やディベートの巧みさ、格調の高さに価値がおかれた。

古代ギリシア時代のソフィストらの弁論術、ソクラテスの問答法は、口頭プレゼン、ディベート重視の文化的原点であろう。弁論重視はローマ時代にも継承・発展され、弁論に卓越することは政治家として重要な要素だった。その最高峰がローマ共和制末期の弁論家であり、政治家であるキケロなのである。文章が重視されなかったわけではないが、文章が書けるだけでは真の知識人、リーダーとしては十分でなく、公衆を説得、魅了するような雄弁さが高く評価されたのだ。

もちろん、弁論文化が発展するためには、政治や社会生活において自由な言論が許容されることが前提となる。従ってアルファベットの文字体系からストレートに弁論文化が生まれるわけではない。古代ギリシアやローマの共和政体は弁論文化の土壌となった。ローマも帝政に移行し、皇帝権力が絶対視される時代には、弁論家は活躍の場を失ったはずである。ローマカトリックの宗教的な権威が政治・社会を覆い、それ以外の世界観が一切否定された時代も弁論文化にとっては不遇の時代であったことだろう。

近現代における米国の弁論文化は、ギリシャ・ローマ時代に起源する文化的要素が、米国の独立戦争を経て大統領制と議会制民主主義の土壌の上で、再生されたもの言えるだろう。

【「俺にも言わせろ」衝動を解き放ってみよう】

さて、弁論か文章かの表現形態こそ違え、旺盛、活発なブログへの書き込みに見られるとおり、私達日本人にも旺盛な「俺にも言わせろ」衝動があるのだから、公論の場でもっと自己の主張を解き放って見たらどうだろうか。ブログも良いが、匿名性に守られた世界でネチネチ書き込み合っているだけでは、ちょっと隠微だろう。

ありがたいことに世の中では、無料のセミナーやら講演会が沢山開催されている。選挙の時期が来たら、候補者の講演会などは絶好の場だ。講演者の話が終わるや否や、われもわれもと手を上げて、質問でも意見でも臆することなくぶつけてみよう。そんなに難しいことじゃない。公論の場のエチケットは守りながら、ブログに書き込むのと同じ調子で言葉にして言ってみるだけだ。

私は米国ワシントン勤務時代の4年間、これを実践してみた。英語で話さなくてはならない、ハンディがあり、毎度言いたいことが上手に表現できるわけではないが、上手くできた時には一種の爽快感が得られる。公論の場で臆することなく発言する、そんな日本人がちょっと多くなれば、ひょっとして日本の社会が変わり始めるかもしれない。

以上